

実際家のためのOR

小野 悠次



私は1909年生まれ、其の内には米寿も迎えようという老翁である。曲がりなりに卒業したのは数学科だが、その背景の哲学的考察に興味を抱いて、強いていえば、論理を中心に考えてきた。その他には、陸上競技で日本選手権、極東オリンピック(今のアジア大会)などでどうやら入賞はしているものの、いずれも大敗の2着で、とても自慢できるような成績ではなかった。ただ、考えながら競技をしたことだけは多少の誇りにしている。とてもOR的などとはいえないが、

後から考えての話だが、多少ともORにからんだ話となると、なんと尋常小学校の5年生時の苦々しい思い出にさかのぼる。1920年頃の話で、その頃の私は身体も虚弱で、学校生活でも、とても強気にはなれなかった。軍神とまでいわれた東郷元帥の「100発100中の砲1門はよく100発1中の砲100門に對す」といわれたことが小学校5年の読本に出ていたが、それは、おかしいと思っても、正々堂々とそれを言い出す勇気はなかった。ただ、その説明のところを当てられて、もじもじする以上のことはできなかった。

私が、それはおかしいと思っているのを知っていた勇敢な友人がいて、彼が、小野がおかしいと言っていたとばらしてしまった。

私は、それを確かめられると、さすがに否定もしかねた。そこで、軍神の言にたてついたということで、教室の外へ立たされる羽目になった。ところが、私の考えをばらした友人は、私の考えを理解していたとは思わないが、義侠心のある友人で、私と一緒にならんで立ってくれた。

後から考えると、私がOR的な考えを強く抱いたのはこれが最初で、教室外の廊下に立たされても、私は自分の考えが正しかったのだし、この試練を友人の助け

もあったにせよ乗り越えたことを未だに誇りにしている。

このことがあまりにも印象的であったので、ORの話させられると、ついこのことを持ち出してしまうようになっていく。

話は変わるが、私は妙な関係から、ORの会に顔を出すようになり、ORを専門的に勉強したことはなかったが、少なくとも好意は持ち続けてきた。そして、私のような好意だけを持つ素人も、OR学会のためには役に立つのではないかと考えている。

そんなご縁で、なんと名誉会員に押し上げられ、毎月、OR学会誌をいただいている。とても精読はしないが、面白そうなところには目を通している。ところが、OR学会誌は、いまのような姿で良いのかをいぶかっ

てもいる。ORには、手法の研究者もいるが、利用者もいる。ところが、利用者となると、ORの手法の研究はしない。また、できもしないが、自分の仕事に使えるものはないか探し求めている人がいる。ところが、OR学会誌の現状ではこのような人々に十分な相談相手になってあげられるだろうか。

この人たちは、たぶん、今のOR学会誌の内容を理解できないのではないのだろうか。しかも、実際家には学者尊重の気分が非常に強い。私も、学界の人間の端くれだが、実業家の人たちからは、私などでも大いに大切にし、あまり突っ込んだことは聞かれない。このことはORの手法研究者たちに対しても同様だろう。この人たちは、なんとか手がかりはないかと探し求めているが、学者先生の気にさわることにはなかなか言わない。

このような人々の心をひらくためには、学者先生たちがこのような人たちとあだ名で呼び合えるくらいの仲になるほかないと思う。が、それも現実にはなかなか

か難しかろう。

私はORには素人だが、OR学会のよきファンにはなろうと思っている。そうすると、手法中心の現在のOR学会誌では、具体的にORを使って考えてみようとしている人々の心はとても惹きつけられないだろうと憂慮している。

具体的にORを使って考えようとしている人々の多くは、企業であれ官僚であれ、企画者として重要な地位にある人で、プライドもあるので、OR学会誌の手法中心の記事に対して、現実の企画となかなか結びつかないし、現実の問題との結びつきをはっきりさせられ

もしまい。しかも、それができないことを言うことはプライドが許すまい。そんな人たちとしては、現実のOR学会誌ではなんとも物足りないが、そう公言する前に、具体的には役立たないと言って捨て去るのはいか。OR学会誌の現状ではそれも仕方あるまいと私には考えられる。しかし残念ながら、このような人たちの心を惹きつけるような手段も思い浮かばない老いぼれの無力さをしみじみ感じている。

若い有能な編集者が、この点大いに考えて、私がお手上げの気持ちにならされているこの難問を1歩ずつ解決されることを心から祈るばかりである。

先月号に掲載されました森口繁一氏の「私のORライフ」につきまして、著者の希望による補足と訂正を以下に掲載します。

Feeneyの言葉(p. 119, 右↑3 ; Arnoffは誤りであることを矢部眞氏が教えてくれた) についての補足

講師の一人 G. J. Feeney は、終わりに近いころ、私を頑固で物分りの悪い上司だと考えてください。そして、私に向って、ORが会社にとってなぜ必要なのか、どういう役に立つのかを説得してみなさい。

といった。受講者は何人か立って、いろいろ試みたが、「頑固な上司」は、一向に納得しない。

ややあって、かれは、「私ならこう説明する」といって、まず黒板に書いたのが

O. R. is a method of making mistakes
という1行であった。「過ちを犯す方法」とは、一体何を言い出すのだろうと、一同あっけにとられていると、かれは通訳の終わるのを待って次の行に

quickly
と書いた。なるほど、「短期間にいろいろな試行錯誤

を経験する方法」なら役に立つかな、と思い始めたところへ、第3行に

through simulation.

と書いたのであった。シミュレーションなら、実害は無いのだから、過ちをいろいろ犯してもよいわけだ。

ORの本質をよく言い表したものであると、いまでも感銘深く思い出す言葉である。(補足おわり)

正誤表

| ページ | 段 | 行 | 誤 | 正 |
|-----|---|-----|------------|-----------|
| 119 | 右 | ↓5 | 電力が2000kWh | 電力が2000kW |
| 119 | 右 | ↓14 | 2000kWh | 2000kW |
| 119 | 右 | ↓14 | 500kWh | 500kW |
| 120 | 左 | ↓14 | 1つ | 一つ |
| 120 | 左 | ↓20 | 1つ | 一つ |
| 120 | 左 | ↓22 | 1つ | 一つ |
| 120 | 右 | ↓13 | 説明を工夫し | 説明を工夫し |
| 120 | 右 | ↓13 | これと実例で | これと実例で、 |

(編集委員会より)これらの校正ミスをお詫びします。